松山窯跡出土陶磁器の偏光顕微鏡観察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2945

「松山窯跡出土陶磁器の偏光顕微鏡観察」

田中 智絵子

松山窯跡は石川県加賀市にある幕末から明治初期にかけて操業した陶磁器の窯跡で、当学古学研究室によって 1979、80 年に発掘が行われている。この窯跡出土の陶磁器を偏光顕微鏡観察と画像処理による分析によって定量化し、その特徴を抽出する事を目的とした。

出土陶磁器は日用品が中心で多数の器種、釉薬が見られる。この中から陶器 6 点、磁器 5 点、素焼 3 点、窯道具 2 点合計 16 点の資料を選んで分析を行った。分析は試料を薄片化し、偏光顕微鏡 40 倍で観察しコンピュータ上で鉱物と空隙と基質に色分けし、それぞれの素地内に占める割合を求め、また鉱物については粒子の面積も計測するという方法をとった。

その結果、陶器の中でも胎土が数種類存在すること、磁器では大型品と小型品に大きな違いがないことなどが分かった。いろいろな器種、釉薬を使った資料を 1～2 点ずつしか分析できなかったため細かい傾向まで探ることはできなかったが、多彩な松山窯の出土品を少量ながら定量化することができ、他の窯跡出土品との比較研究の可能性が広がった。

染付磁器小壺